

JICA 地域別研修 中西部アフリカ幼児教育

総括

(1)研修基盤 連絡体制

幼児教育の研究と指導者育成に実績があり、平成15年～17年の3年間にわたり「文部科学省初等中等教育分野等の協力強化のための拠点システム事業(幼児教育分野)」を実施してきた本学において、研修基盤の整備は比較的短期間で可能であった。学内には、幼児教育に関する専門領域の教官が多数おり、研修への理解と協力を得られることができたほか、敷地内に附属校(ナーサリー・幼稚園・小学校)が設置されている関係で、視察の受け入れ要請など、連絡も円滑に進められた。さらに今年度は、本学同窓会(ジネット)の熱い支援を得て、幼児教育の研究・実践の各分野、各地域で活躍する卒業生の持つ人脈と情報力をフルに活用することができた。本学の持つこのような知的財産の活用は、途上国の幼児教育の展開に貢献できるのみならず、本学の存在意義を高め、かつ日本国内の幼児教育界の活性化につながるとの期待の声が卒業生からあったことを付記しておきたい。

(2)研修の焦点

明治以来、本学の附属幼稚園が拠点となって推進してきた「子ども中心の幼児教育」、すなわち「子どもの自由な遊びを尊重した生活の中で、子ども自身が主体的に学ぶ力を育む」理念と実践を紹介する講義と視察を研修の焦点に据えた。完成態である大人に対して子どもを未分化・未熟な存在ととらえる発達観とは対照的に、子どもの能動性を尊重し、保育者主導ではなく、子ども自身が興味や関心を充実させられるような環境を整えて、保育者が必要な援助をしていく本学の事例に触れることで、それを一方的に模倣踏襲するのではなく、研修員が各国の幼児教育の現状を相対的に検証しながら、独自の幼児教育を開発する契機となることを目指した。

(3)研修の特性

近年、国際教育協力では、乳幼児期からの養護と教育を一体化させた総合的アプローチ(Early Childhood Development = 乳幼児開発)が重視されている。よって、本研修では、学際的に幼児教育を学ぶ機会を積極的に設けた。すなわち、幼児教育/保育の制度・政策の基礎的整備法や子ども理解の専門的知識(発達心理学・教育学・小児保健・子どもの権利と児童福祉など)の提供、指導案や教材・玩具作成の実技指導、人材育成(教員養成・新人研修・現職教育)の検討、両親教育や地域・家庭支援の意義と方法の確認、幼児教育の国際比較討論などの講座を通じて、乳幼児発達支援の多角的展開のために、大学の知見と経験を活用できるようにした点が特性といえる。

(4)今回特に留意した点、その結果

日々の課題が明確になるよう仏語のシラバスと、研修の目的と方向性、全体のなかでの位置づけを示すイメージ図を作成し、研修期間中も機会のあるごとに確認できるよう留意した。その点については、非常にわかりやく役立ったとの評価を得た。

また、講師や視察先から得る情報の中には、少子化といった社会問題を筆頭に子どもの「生きる力」の低下、幼児教育に関する財源の不足、少年犯罪の凶悪化、いじめや虐待の深刻化といった現代日本に顕在化してきた固有の現象を危惧するゆえに発せられたものもあり、時として研修員に混乱や誤解を招くこともあった。乳幼児が育つ自然環境や社会体制、物理的条件、精神的風土の異なる中西部アフリカの視点にたつて、日本の幼児教育の成果や問題点を正しく理解してもらえよう、当日まで各講師・視察先担当者と連絡を取り合って情報を共有し、可能な限り講義内容や視察の組み立ての修正変更、翻訳表現の工夫や語彙の統一を重ねた。

さらに、日々の振り返りにより研修生が「自分が今日学んだこと」「帰国後に活かそうな点」を毎回考えさせることによって、研修の最終目的を確認させ、意識を高めた。

質疑応答や日々の振り返りのアンケート結果を踏まえて研修員の関心事を確認し、それらに専門的見地から具体的に応えてもらうよう関係者に依頼した。ただし、このような事態は事前に想定していなかったため、残念ながら十分に対応できたとはいえない。

(5)研修員の態度・反応

研修員の態度は全期間中を通じて、非常に良好であった。毎回の振り返りのアンケートの結果はおおむね好評だった。日々の講義や視察・レポート発表やレポート作成においても積極的な発言が多く見られるなど、研修員の態度は全体としては良好であったといえる。特にセネガル、ブルキナファソ、マリから参加の男性の研修員は、非常に反応がよく、多くの場合、鋭い質問や本質を突く意見が出て活発な議論ができた。また、研修員同士の雰囲気もよく、研修員同士のコミュニケーションにより、域内の幼児教育に関する情報交換がなされたことも研修の効果を上げたといえる。

ただし、研修員の中には、積極性にばらつきが見られたことも否定できない。発言の少なかった研修員もあり、集団に十分に溶け込んでいないと思われる研修員も若干名いた。しかし、それも全体の和を乱すまでにはいたっておらず、全体としては望ましい雰囲気になっていたといえる。

(6)研修の著しい成果

わずかな情報を頼りにしていた研修実施前の段階では、当該地域の幼児教育については、各国とも幼児教育の意義とその必要性が政府関係者のみならず教育関係者にも十分に認識されておらず、制度政策の整備や財源の確保が立ち遅れ、人材が不足していること、また就学率は数パーセントであり多くの場合都市部の富裕層を対象としており、仏語の習得を目標とした「就学準備」教育が中心であること、教師主導で細かなタイムスケジュールが組まれ、子どもの自由な活動や遊びが学びの機会として十分活用されておらず、時として体罰も行われているといった程度の乏しい理解に終始していた。よって、その対極にあるともいえる、日本の「子ども中心の幼児教育」の理念と実践が、研修員にどこまで理解してもらえるか、また、四季折々の自然も豊かで物資に恵まれ何不自由なく健康に育つ日本の子どもたちに対して、どんな印象を持つだろうか、結局はソフト面ではなくハード面での支援を期待されるのではないかという不安が少なからずあった。

しかし、そうした不安は、最初の視察先、附属幼稚園での研修員の態度から吹き飛ばされた。その後も、視察先では、「感動した」「素晴らしい」という感嘆句が随所で聞かれ、体感するすべてを記憶にとどめ記録に残し、あらゆる疑問をぶつけてくるその真摯な姿勢と、何よりも、研修員の子どもたちに向ける視線の優しさ、表情の柔らかさに、そして彼らの幼児教育にかける意欲の高さと熱い情熱に、受け入れ側が圧倒されることとなった。

特に、日本の「幼児教育」の理論的根拠となる発達心理学の講義(内田)、倉橋惣三の保育論を紹介した「子ども中心の生活の展開」の講義(浜口)に対する、研修員の関心の高さには目を見張るものがあった。

また、子どもは個々の興味や関心に応じて勝手に遊んでいるのではなく、教師による入念な計画・準備と一人一人の発達に対する考察・評価のもとで日々の生活を送っていること、教師と子どもは、情緒的にも身体的にも親密な関係を保ち信頼関係を築きながら「楽しく学んでいること」、決して集団での学習活動が否定されているのではなく、集団と個、静と動のメリハリの利いた活動のなかで、生活の基本的習慣や自立のための訓練を行い、他者理解と協調性を養っていること、さらには子どもを通じて過去と未来、教育現場と地域や家庭がつながり、心身ともに健康な育ちが保障されていくことなどについても、多くの講義や視察を通じて、十分理解されたように思う。

さらに幼児教育・保育の政策制度の基本的整備法の講義のみならず、「ECD に関する国際協力の動向」(三輪)や「幼児教育 国際比較」(星)を通じて、他国の取り組みを比較の視野に入れることで、多様な幼児教育の展開を模索する一助となったことが、本研修の著しい効果といえる。

(7)課題

第一の課題としては、本研修が、「幼児教育」に重点を置くのか、「ECD = 乳幼児開発」に重点を置くのか、JICA・学内で十分な協議を重ねた上での受け入れ準備を進める余裕がなかったこと、また、現地の実態とニーズを確認できる情報が不足していた点が、挙げられよう。そのため、研修プログラム作成においては、国内向け研修の一般的な事例を参照する以外方法がなく、「保育」ではなく「教育」に偏ったプログラム構成や、今現在日本が克服すべき幼保二元化体制の説明が重複し、それを是とするかのような印象を与える結果となり、研修開始後に研修内容の過不足を認識することになってしまった。より早い段階で、中西部アフリカ地域のかかえる問題を精査・分析すること、現地におけるECDの国際協力動向を踏まえ、さらに活動経験のあるJICA職員や協力隊経験者からのヒアリングなどを積極的に行い、それらを参考にしながら研修のプログラム作成に十分な時間と討議を割く必要があったのではなかろうか。

第二に、研修の目標として行動計画の策定が盛り込まれていたが、幼児教育という息の長い営みにおいて、目に見える拙速な成果を求めることが果たして適切であるだろうか検討を要すると思われる。また、当然のことながら研修員の職位や専門性に応じた行動計画の策定の支援とその実現がなされることが不可欠であろう。研修員による現地レポートの報告会、本邦研修による各自の問題点の把握と改善項目の抽出、方法論の模索、行動計画策定と帰国後の実施までが、一貫したストーリーを持って流れていけるようなプログラムの作成が今後不可欠であるように思われる。

第三に、中西部アフリカにおける、五歳未満児の死亡率や栄養失調・疾病患率が非常に高く、乳幼児への支援が喫緊の課題となっている現状を踏まえた場合、研修の中で、生存を保障するための医療・衛生・栄養・福祉、子どもの権利に関する講義を充実させること、ゼロから三歳児のケアを行う保育所の実践、子どもの虐待防止や特殊教育の取り組みを、紹介することも有意義かと思われる。

アンケートによれば、一日実習体験や地方視察などの要望もあったため、今後の検討材料としていきたい。さらに、帰国後のアドボカシー活動に役立つ講義も必要かと思われる。今回は、カンボジアでのECDの成功例が紹介され関心を集めていたが、中西部アフリカと事情を同じくするアジア各地での取り組みの具体例を提供する機会は、有効ではないだろうか。

第四に、今回の研修では研修生に対して2種類のアンケートを実施した。ひとつはJICA側が作成・実施したもの、もうひとつはお茶大側で作成・実施したものである。前者についてはJICAとして研修の概括を行い、特に事務上の課題を明確にする目的があり、後者については研修内容の課題をチェックすることと、アンケートを研修生に毎時間記録させることで、最終的な目標となっている行動計画の策定に役立てることを目的としていた。しかしながら、研修生にとってはこれらの目的が個別に意識され記入されていることは少なく、今後アンケートの成果を生かしていくためにも、事前の項目設定と事後の分析については、JICA側とお茶大側が協力して行っていくことが必要であったと考えられる。

最後に、研修受け入れのキャパシティの問題が挙げられる。今回の研修生は5カ国15名であったが、JICAとの協力体制やお茶大内のキャパシティを考えると、全員に十分なケアが行き届かなかった点が心残りであった。適切な参加国数、研修生の人数、研修期間、職種の選択等について、今後慎重に検討すべきであると思われる。

講義

形式

前半はテキストを利用した講義、後半は質疑応答が中心であった。

講義内容はテキストにして配布済みであったため、事前に予習している研修員が多く、各自の興味や関心にしたがって講義を受ける態勢ができていたように思う。

討論・実習・演習・発表

(1)総括

日を追って質の高い討論ができていき、各国の置かれた状況や職種や身分の違いを超えて五カ国15人がひとつとなり、中西部アフリカの幼児教育の将来について話し合える貴重な機会となった。

指導案や教材・玩具作成の実習では、講師の入念な準備のおかげで、随所で笑みがこぼれるとても楽しい時間を過ごすことができた。

一方、発表では、時間不足であったことは否めない。今後はより多くの時間を確保することも含め、議論の流れの整理、焦点の絞りこみなど、検討していく必要がある。

(2)見学

率直に言って、アフリカの研修員15名で幼児教育現場を見学することには多くの困難が伴った。研修生側の立場に立てば、視察先では最大限の情報を得るため、なるべく自由に動き、映像での情報収集を行いたいというニーズがあることは十分理解できる。しかし一方、特に現場関係者から、見慣れない研修生に対す乳幼児の反応の予想がつかないため、視察の際、ハード面での紹介に限定させてほしいという要望や、子どもの保育や教育の流れをできるだけ妨げないような配慮を切望され、双方のニーズを調整していくことは大きな課題であった。

今回は、外国からの視察の受け入れに慣れており、本学との信頼関係が十分な機関に依頼したが、受け入れ側の意向を最大限尊重するため、下見と事前の打ち合わせを十分行い、幼児の生活や遊びの流れに支障をきたさないよう時間帯・コース・人数を調整した。また、研修員に視察のマナーを徹底するため、事前に「日本の幼児教育を理解してもらうために」という資料を作成し配布した。当日は、教育現場への影響を最小限にするため同時通訳のイヤホンを使用した。

機関によっては、数人ずつのグループに分かれて順番に現場を見学することになったため、待機組みに考慮して、各機関が作成した幼児教育実践の映像資料を視聴する時間を設け、さらに研修員に一律に同じ情報が伝わるよう受け入れ側に同じ説明を数度繰り返していただくよう依頼した。また、視察先での個人での写真撮影も禁止したことから、視察先の映像を今後に生かしたいという研修生のニーズについては、お茶大側のスタッフの撮影した写真を一括して現像して配布するほか、映像資料をまとめた DVD 教材を研修終了時に提供して、研修生の要望のこたえる努力を行った。が、研修と同時進行でこれらの資料の準備と製作を行ったため、その負担は大きかった。

見学の場合、熱心にメモを取りながら目で見て感じる全てを吸収しようとする意欲的なグループと、時として疲れを見せるグループに分かれてしまうことがあった。全員の期待に応えることはできないが、今後は、見学の内容や時間、コースの選択肢を広げる必要があるかもしれない。

(3)研修期間・配列・密度

初年度であったため、研修期間については本学の予定を優先させ、夏季休暇中に設定したが、あいにく断食月と重なった。研修終了後の JICA によるアンケートでは、「視察先をもっと減らしてもよい」との意見が出た一方で、地方の視察や障害児対象施設などへの視察の要望も出た。また、先述のように、レポート発表の時間は絶対的に不足しており、特にインセプション・レポートについては、時間増の必要を感じる。配列や密度については、研修員から大きな不満はなかったようだ。

(4)テキスト・機材・施設

すべての講義原稿と視察先を紹介する資料のほか、文部科学省『幼稚園教育要領』、厚生労働省『保育所保育指針』の翻訳を行い、研修前にテキストを作成した。現地では紙媒体のテキストの不足が指摘されていたため、研修員からは非常に喜ばれた。機材・施設については、本学の最新の機材や施設を利用したため、特に問題は生じなかった。

4. 研修員

(1)資格要件

- (1) 所定の手続きにより相手国政府より推薦された者
- (2) 幼児教育分野で 5 年以上の経験を持ち指導的立場にある者
(中央または地方の視学官・教育行政官、幼稚園の園長、教員養成校の教授等)
- (3) 原則、大学卒業または同程度の資格(教員養成カレッジ等)を有する者
- (4) 原則、本研修プログラム終了後 5 年間は幼児教育分野に携わること
- (5) 原則、年齢(25 歳から)45 歳以下であること

(6)精神的・身体的に健康であること

(7)軍籍にない者

(2)研修参加への意欲・受講態度

全員、非常に意欲的でよくまとまっていた。断食が始まった当初は、昼食や水分を摂取しないため、午後の講義では集中力や緊張感が途切れそうになることもあったが、おおむね受講態度は良好であった。健康管理については、JICE スタッフ・研修監理員が細やかに配慮してくれたおかげで、大きく体調を崩す研修員もおらず、全員元気に研修を修了できた。

5. 研修環境

都心の緑に囲まれた静かなキャンパスで、ゆったりと研修を進めることができた。

地下鉄の利用も問題なかったようだ。視察の場合は、バスを利用したため、異国の慣れない環境での移動の負担は最小限に抑えることができたのではないかと思う。

6. その他特記事項

研修生の使用言語が仏語であったため、お茶大側のスタッフと研修生とのコミュニケーションが難しい場合が多々あった。そのため、研修生のサポートが十分にできない場合もあり、心残りであった。研修監理員の方は、研修や視察の通訳で多忙を極めており、このような日常的なコミュニケーションの補助を望むことが難しく、お茶大側で簡易通訳者のアルバイトを準備して対応はしたが不十分であったと思われる。今後は、現地の事情や研修内容に対する専門性のある程度持った通訳補助を研修全体のサポート役としてお願いすることができれば、さらに研修の質を上げることが可能であるものと考えられる。

(2006年11月10日 JICA 提出「業務完了報告書」より一部抜粋)